

特異初期値問題の解の表示について

明治学院大 経 石井 坦

§ 0 序 複素領域に於る特異初期値問題は, Hamada [2] により, 最初に, 特性根が相異なる場合に研究され, その後, Hamada-Leray-Wagschel [3], Nakamura [11], Hamada-Nakamura [4] 等により発展させられてきた。また最近でも Urabe [10], Ōuchi [9], Kobayashi [6] など, この分野での成果が相次いでいる。この問題の興味は, 初期面上に与えられた解の特異性が複素領域の中にどう伝播するかを調べることにあるのだが, 本稿は, 特性根が正則であって多重度は変り得る場合について, とにかくも解の表示を与えよう, というもので, 特異性の伝播を説明するには到っていない。

我々の発想は, Kumano-go-Taniguchi [7] による実数係双曲型方程式系の理論(これについては熊, 御 [8] に詳しい), に多くの影響を受けている。事実, 多重特性関数はそこに出てくるし, 解を累次積分の無限和で表わすことも同じである。

しかし、我々は、輸送方程式を一般化して定義し、これに  
 依拠して係数を決定する、という点で彼等とは異なっている。  
 本稿は Ishii [5] の解説にもなっている。

§1 問題の設定  $\Omega$  を  $\mathbb{C}^{n+1}$  の原点  $0$  を含む領域とし、その  
 点  $(t, x) = (t, x_1, \dots, x_n)$  で表わす。  $\Omega$  に正則な係数を持つ  
 $m$  階偏微分作用素  $H(t, x; \partial_t, \partial_x) = \partial_t^m + \sum_{\substack{\alpha_0 + |\alpha| \leq m \\ \alpha_0 < m}} a_{\alpha_0, \alpha}(t, x) \partial_t^{\alpha_0} \partial_x^{\alpha}$   
 と、初期面  $S = \{t=0\} \cap \Omega$  および  $T = \{t=x_1=0\} \cap S$  に対し  
 $T$  上に極点を持つ特異初期値問題

$$(E) \quad H u = 0$$

$$(C) \quad \partial_t^l u \Big|_S = \delta_{l, l_0} c(x') / x_1^p \quad (l = 0, 1, \dots, m-1)$$

を考える。但し  $x' = (x_2, \dots, x_n)$ 、 $c(x')$  は  $T$  で正則、 $p$  は自然  
 数である。我々は次の仮定を設ける。

仮定  $H$  の主部  $h$  に対し  $h(t, x; \tau, \zeta) = \prod_{i=1}^m (\tau + \lambda_i(t, x; \zeta))$   
 と表わしたとき、各  $\lambda_i(t, x; \zeta)$  即ち特性根は、 $(t, x; \zeta)$  に関  
 し  $\Omega \times \Omega^*$  で正則である。但し  $\Omega^*$  は  $e = (1, 0, \dots, 0)$  を含む  $\mathbb{C}^n$   
 の領域とする。

注 初期条件 (C) は計算の煩雑を避けるためこうした。

## §2 多重特性関数, 多重特性帯

定義 2.1 作用素  $H$  に対し、多重特性関数  $\phi_k = \phi_k((t)_k, x) =$

$= \phi_k(t_1, \dots, t_k, x; \eta)$ ,  $k=1, 2, \dots$ ,  $\varepsilon$  次の一階偏微分方程式の系により帰納的に定める。

$$(E) \begin{cases} \partial_{t_k} \phi_k(t)_k, x; \eta) + \lambda_k(t_1 + \dots + t_k, x; \partial_x \phi_k) = 0 \\ \phi_k(t)_{k-1}, 0, x; \eta) = \phi_{k-1}(t)_{k-1}, x; \eta) \\ \phi_1(0, x; \eta) = x \cdot \eta \end{cases}$$

但し,  $(t)_k = (t_1, \dots, t_k) \in \mathbb{C}^k$ , また  $\lambda_k$  は,  $k = km + i$   $1 \leq i \leq m$  と表わしたとき  $\lambda_k \equiv \lambda_i$  と定める。また, (E) に対応する 多重特性帯  $(x^k; \xi^k) = (x^k; \xi^k)(t)_k, x; \eta) = (x_1^k, \dots, x_n^k; \xi_1^k, \dots, \xi_n^k)(t)_k, x; \eta)$  と, 次の一階常微分方程式系の系により帰納的に定める。

$$(B) \begin{cases} \frac{dx^k}{dt_k} = (\partial_{\xi} \lambda_k)(t_1 + \dots + t_k, x^k; \xi^k), \quad \frac{d\xi^k}{dt_k} = -(\partial_x \lambda_k)(t_1 + \dots + t_k, x^k; \xi^k) \\ (x^k; \xi^k)(t)_{k-1}, 0, x; \eta) = (x^{k-1}; \xi^{k-1})(t)_{k-1}, x; \eta) \\ (x^1; \xi^1)(0, x; \eta) = (x; \eta) \end{cases}$$

$$\underline{\text{系 2.1}} \quad \begin{aligned} \phi_k(t)_{k-l}, 0, \dots, 0, x; \eta) &= \phi_{k-l}(t)_{k-l}, x; \eta), \\ (x^k; \xi^k)(t)_{k-l}, 0, \dots, 0, x; \eta) &= (x^{k-l}; \xi^{k-l})(t)_{k-l}, x; \eta), \quad 1 \leq l \leq k-1 \end{aligned}$$

多重特性関数(帯)の優関数評価に関しては, 次の補題が基本的である。

補題 2.1  $1^\circ$   $\phi_k(t)_k, x; \eta)$  は次の優関数評価をもつ。

$$\phi_k(t)_k, x; \eta) \ll \Phi\left(K \sum_{l=1}^k t_l + \sum_{i=1}^n x_i + \sum_{i=1}^n (1-e)_i\right)$$

但し,  $\Phi = \Phi(s)$  は,  $s=0$  の近傍で正則な  $k$  に依らない適当な一変関数, また  $K > 0$  も  $k$  に依らない定数である。

2°  $(x^k; \xi^k)(t)_k, x; \eta$  も同じ型の優関数評価をもつ。

[証明] 1°のみを証明する。2°も同じやり方でできる。

$$\Psi_k(t)_k, x; \eta \equiv \phi_k(t)_k, x; \eta - x \cdot \eta + \sum_{l=1}^k \lambda_l(0,0; \eta) t_l$$

と置く。すると(Ⅱ)より、 $\Psi_k$ は次の方程式をみたす。

$$(\bar{\Psi})_k \begin{cases} \partial_{t_k} \Psi_k + \lambda_k(t_1 + \dots + t_k, x; \partial_x \Psi_k + \eta) - \lambda_k(0,0; \eta) = 0 \\ \Psi_k(t)_{k-1}, 0, x; \eta = \Psi_{k-1}(t)_{k-1}, x; \eta, \quad \Psi_1(0, x; \eta) = 0, \quad k=1, 2, \dots \end{cases}$$

次に、次のような優微分方程式を考える。

$$(\bar{\Psi}) \begin{cases} K \Psi'(s) \gg \frac{L}{1 - R(n \Psi'(s) + s)} - L \\ \Psi(s) \gg 0 \end{cases}$$

$$\text{但し, } L, R \text{ は } \lambda_i(t, x; \eta) \ll \frac{L}{1 - R(t + \sum_{i=1}^n x_i + \sum_{i=1}^n (\eta - e)_i)}$$

( $i=1, \dots, n$ ) をみたすように定める。この(Ⅱ)がある  $K > 0$  に対し

$$\Psi_k(t)_k, x; \eta \ll \Psi(K \sum_{l=1}^k t_l + \sum_{i=1}^n x_i + \sum_{i=1}^n (\eta - e)_i)$$

が成り立つことを示そう。実際、 $k=1$  に対しては(Ⅱ)は(Ⅱ)<sub>1</sub>

の優微分方程式になっている。次に、 $1 \leq k \leq k_0 - 1$  に対して成

り立つと仮定すると、

$$\Psi(K \sum_{l=1}^{k_0} t_l + \dots) \Big|_{t_{k_0}=0} = \Psi(K \sum_{l=1}^{k_0-1} t_l + \dots) \gg \Psi_{k_0-1}(t)_{k_0-1}, x; \eta$$

が成り立つから、 $\Psi(K \sum_{l=1}^{k_0} t_l + \dots)$  は(Ⅱ)<sub>k<sub>0</sub></sub> に対する優微分方程式

$$\begin{cases} \partial_{t_{k_0}} \Psi \gg \frac{L}{1 - R(\sum_{i=1}^n \partial_{x_i} \Psi + K \sum_{l=1}^{k_0} t_l + \sum_{i=1}^n x_i + \sum_{i=1}^n (\eta - e)_i)} - L \\ \Psi|_{t_{k_0}=0} \gg \Psi_{k_0-1}(t)_{k_0-1}, x; \eta \end{cases}$$

の解になっていることがわかる。従って求める優関数評価が

得られる。最後に(Ⅱ)を解く。

$$\frac{L}{1-R(n\tilde{\Psi}'(s)+s)} \ll \frac{L}{1-Rn\tilde{\Psi}'(s)} \cdot \frac{1}{1-Rs}$$

であるから、次の方程式をみたす  $\tilde{\Psi} \gg 0$  が求まればよい。

$$K\tilde{\Psi}'(s) = \frac{L}{1-Rn\tilde{\Psi}'(s)} \cdot \frac{1}{1-Rs} - L, \quad \tilde{\Psi}(0) = 0$$

$$\text{故に, } \tilde{\Psi}'(s) = \frac{K-RnL \pm \sqrt{(K-RnL)^2 - 4KRn \left(\frac{L}{1-Rs} - L\right)}}{2KRn}, \quad \tilde{\Psi}(0) = 0$$

である、 $K > RnL$  ならば、複号として  $-$  を採用して解いた  $\tilde{\Psi}$  は条件をみたす。 (証明終)

命題 2.1 1°  $\sum_{j=1}^k |t_j| + \sum_{i=1}^n |y_i| + \sum_{i=1}^n |(\eta - e)_i|$  が十分小さいとき、 $\mathbb{C}^n \ni y \longrightarrow x = x^k(t)_k, y; \eta) \in \mathbb{C}^n$  なる対応は、 $(t)_k, \eta$  をパラメータとみるとき両正則写像となる。

2°  $x^k(t)_k, y; \eta)$  に対しては補題 2.1, 2° に述べた優関数評価が成り立つが、逆写像  $y = y^k(t)_k, x; \eta)$  に対しても同じ型の優関数評価が成り立つ。

注  $\phi_k(t)_k, x; \eta) = y^k(t)_k, x; \eta) \cdot \eta$  である。 (命題証明略)

以下に於て、 $\phi_k$  を扱うときには  $\eta = e$  の場合しか現われなから、今後  $\phi_k, \phi_k(t)_k, x)$  と書かれる場合には  $\phi_k(t)_k, x; \eta)$  を表すものとする。

補題 2.2  $\phi_k(t)_k, x)$  に対し次が成り立つ。

$$\partial_{t_j} \phi_k(t)_k, x) = -\lambda_k(t_1 + \dots + t_k, X^k; \Xi^k) + \sum_{\nu=1}^{k-1} (\lambda_{\nu+1}(t_1 + \dots + t_\nu, X^\nu; \Xi^\nu) - \lambda_\nu(t_1 + \dots + t_\nu, X^\nu; \Xi^\nu)), \quad j=1, \dots, k$$

但し、 $X^\nu = X^\nu(t)_\nu, x)$ 、 $\Xi^\nu = \Xi^\nu(t)_\nu, x)$  は、命題 2.1 に於ける  $x^k, y^k$  を用いて次のように表わされる。 $X^\nu = x^\nu(t)_\nu, y^k(t)_k, x; e), e)$ 、

$$\xi^\nu = \xi^\nu(t)^\nu, \gamma^k((t)_k, x; e); e), \quad 1 \leq \nu \leq k.$$

証明は熊，御[8]，p160，または Kobayashi [6] 参照。

§3 形式解 我々は，(E)，(C) の解  $u(t, x)$  を次の形式で求める。

$$(U) \quad u(t, x) = F_1(t, x) + \sum_{k=2}^{\infty} \int_0^t dt_1 \int_0^{t-t_1} dt_2 \cdots \int_0^{t-t_1-\cdots-t_{k-2}} dt_{k-1} F_k((t)_k, x)$$

但し，積分は， $(t)_k = (t_1, \dots, t_k)$  が  $t_j = \sigma_j t$ ， $0 \leq \sigma_j \leq 1$ ， $\sigma_1 + \dots + \sigma_k = 1$  と表わされるような積分路に沿うものとする。

また，関数  $F_k$  は，

$$F_k((t)_k, x) = \sum_{j=j_k}^{\infty} f_j(\phi_k((t)_k, x)) a_{j,k}((t)_k, x)$$

と表わされ， $j_k$  は初期条件から決まる整数，さらに  $f_j = f_j(s)$  は

$$f_j(s) \begin{cases} = \frac{s^j}{j!} \left( \log s - \frac{\Gamma'(j+1)}{\Gamma(j+1)} \right), & j \geq 0, \\ = (-1)^{j+1} (-j-1)! s^j, & j \leq -1 \end{cases}$$

によって定義され， $a_{j,k}((t)_k, x)$  は  $\mathbb{C}^{n+k}$  の原点の近傍

$\rho \sum_{i=1}^k |t_i| + \sum_{i=1}^n |x_i| < R$  ( $\rho, R > 0$  は  $j, k$  によらない定数) に於て正則な関数である。

定義 3.1 偏微分作用素  $H(t, x; \partial_t, \partial_x)$  に対し，その誘導作

用素  $H_p^k(t, x; \partial_{t_k}, \dots, \partial_{t_{k-m+p}}, \partial_x)$  を次の式により定義する。

$$\begin{aligned} H(t, x; \partial_t, \partial_x) \int_0^t dt_1 \cdots \int_0^{t-t_1-\cdots-t_{p-2}} dt_{p-1} f((t)_p, x) &= \\ = \sum_{\tilde{p}=0}^m \int_0^t dt_1 \cdots \int_0^{t-t_1-\cdots-t_{k-\tilde{p}-2}} dt_{k-\tilde{p}-1} \left[ H_{m-\tilde{p}}^k(t, x; \partial_{t_k}, \dots, \partial_{t_{k-\tilde{p}}}, \partial_x) f((t)_k, x) \right] & \quad (k \geq m) \\ & \quad t_k = \cdots = t_{k-\tilde{p}+1} = 0 \\ H(t, x; \partial_t, \partial_x) \int_0^t dt_1 \cdots \int_0^{t-t_1-\cdots-t_{k-2}} dt_{k-1} f((t)_k, x) &= \end{aligned}$$

$$= \sum_{\tilde{p}=0}^k \int_0^t dt_1 \cdots \int_0^{t-t_1 \cdots -t_{k-\tilde{p}-1}} dt_{k-\tilde{p}} \left[ H_{m-\tilde{p}}^k(t, x; \partial_{t_k}, \dots, \partial_{t_{k-\tilde{p}}}, \partial_x) f((t)_k, x) \right] \quad (1 \leq k < m)$$

但し、積分路は(U)に於て与えられたもの、 $f$ は積分路の上で  $t_k = \dots = t_{k-\tilde{p}+1} = 0$  正則な関数、 $t = t_1 + \dots + t_k$  を表わす。 $H_p^k$ の主部を  $h_p^k$ で表わす。

注意 3.1 この定義の正当性は次の補題 3.1 で示される。

また、 $H_p^k(t, x; \tau_k, \dots, \tau_{k-m+p}, \xi)$  ( $\tau_l$  は  $t_l$  の余変数) は余変数の添数を除き、 $k$  に依存しない形をしているので、特に指示する必要のないときは単に  $H_p(t, x; \tau_k, \dots, \tau_{k-m+p}, \xi)$  と記す。

補題 3.1 1°

$$\begin{aligned} & \left[ H_{m-\tilde{p}}(t, x; \partial_{t_k}, \dots, \partial_{t_{k-\tilde{p}+1}}, \partial_t, \partial_x) \int_0^t dt_1 \cdots \int_0^{t-t_1 \cdots -t_{k-\tilde{p}-1}} dt_{k-\tilde{p}} f((t)_k, x) \right] \\ &= \int_0^t dt_1 \cdots \int_0^{t-t_1 \cdots -t_{k-\tilde{p}-1}} dt_{k-\tilde{p}} \left[ H_{m-\tilde{p}}(\partial_{t_k}, \dots, \partial_{t_{k-\tilde{p}}}, \partial_x) f((t)_k, x) \right] \\ &+ \left[ H_{m-\tilde{p}-1}(\partial_{t_k}, \dots, \partial_{t_{k-\tilde{p}}}, \partial_t, \partial_x) \int_0^t dt_1 \cdots \int_0^{t-t_1 \cdots -t_{k-\tilde{p}-1}} dt_{k-\tilde{p}-1} f((t)_k, x) \right] \end{aligned}$$

2°  $H_p(t, x; \tau_k, \dots, \tau_{k-p}, \xi)$ ,  $h_p(\dots)$  は  $\tau, \xi$  に對する  $p$  次の多項式で、次の式から定めらる。

$$H_m(t, x; \tau_k, \xi) = H(t, x; \tau_k, \xi), \quad H_0 = h_0 \equiv 1$$

$$H_{m-\tilde{p}}(\tau_k, \dots, \tau_{k-\tilde{p}}, \xi) = \frac{1}{\tau_{k-\tilde{p}} - \tau_{k-\tilde{p}+1}} \left( H_{m-\tilde{p}+1}(\tau_k, \dots, \tau_{k-\tilde{p}+1}, \tau_{k-\tilde{p}}, \xi) - H_{m-\tilde{p}+1}(\tau_k, \dots, \tau_{k-\tilde{p}}, \tau_{k-\tilde{p}+1}, \xi) \right)$$

$h_p$  は上の式で  $H_p$  を  $h_p$  で置きかえて得らる。

3°  $h_p$  に對しては、さらに詳しい次の表示が得らる。

$$h_m(t, x; \tau_k, \xi) = (\tau_k + \lambda_{\sigma(1)}(t, x; \xi)) \cdots (\tau_k + \lambda_{\sigma(m)}(t, x; \xi))$$

$$\begin{aligned} h_{m-\tilde{p}}(\tau_k, \dots, \tau_{k-\tilde{p}}, \xi) &= \sum_{1 \leq j_1 < \dots < j_i < \dots < j_{\tilde{p}} \leq m} (\tau_{k-\tilde{p}} + \lambda_{\sigma(j_1)}) \cdots (\tau_{k-\tilde{p}} + \lambda_{\sigma(j_i)}) \cdot 1_{j_i} \cdot (\tau_{k-\tilde{p}+1} + \lambda_{\sigma(j_{i+1})}) \cdots \\ & \times (\tau_{k-\tilde{p}+1} + \lambda_{\sigma(j_2)}) \cdot 1_{j_2} \cdot (\tau_{k-\tilde{p}+2} + \lambda_{\sigma(j_2+1)}) \cdots (\tau_{k-\tilde{p}+i-1} + \lambda_{\sigma(j_{i-1})}) \cdot 1_{j_i} \cdot (\tau_{k-\tilde{p}+i} + \\ & + \lambda_{\sigma(j_i+1)}) \cdots (\tau_{k-1} + \lambda_{\sigma(j_{\tilde{p}}-1)}) \cdot 1_{j_{\tilde{p}}} \cdot (\tau_k + \lambda_{\sigma(j_{\tilde{p}+1})}) \cdots (\tau_k + \lambda_{\sigma(m)}) \Big|_{1_{j_1} = \dots = 1_{j_{\tilde{p}}} \equiv 1} \end{aligned}$$

但し,  $(\sigma(1), \dots, \sigma(m))$  は  $(1, \dots, m)$  の任意の置換である。

[証明]  $1^\circ, 2^\circ$  は同時に示す。即ち,  $1^\circ$  が成立し,  $H_0 \equiv 1$  であれば  $1^\circ$  から定まる  $H_{m-\tilde{p}}, 0 \leq \tilde{p} \leq m$  が, 定義 3.1 に於る誘導作用素であることを容易にわかる。そこで  $1^\circ$  に於る  $H_{m-\tilde{p}}$  と  $H_{m-\tilde{p}-1}$  の間には  $2^\circ$  の関係があることを示すのである。さらに,  $1^\circ, 2^\circ$  の関係は,  $H_{m-\tilde{p}}(\tau_k, \dots, \tau_{k-\tilde{p}}, x) \equiv (\tau_{k-\tilde{p}})^l, l=0, 1, \dots$  の場合に示さねばよいから, これを  $l$  に関する帰納法で証明しよう。  $l=0$  に対しては明らかである。  $0 \leq l \leq l_0$  に対し  $1^\circ, 2^\circ$  が成立したとすると,

$$\begin{aligned} & \left[ \partial_t^{l_0+1} \int_0^t dt_1 \dots \int_0^{t-t_1-\dots-t_{k-\tilde{p}-2}} dt_{k-\tilde{p}-1} f((t)_k, x) \right] = \partial_t^{l_0+1} \int_0^t \int_0^{t-\dots-t_{k-\tilde{p}-2}} dt_{k-\tilde{p}-1} f((t)_{k-\tilde{p}}, 0, \dots, 0, x) = \\ & = \partial_t^{l_0} \left\{ \int_0^t \int_0^{t-\dots-t_{k-\tilde{p}-2}} dt_{k-\tilde{p}-1} \partial_{t_{k-\tilde{p}}} f + \int_0^t \int_0^{t-\dots-t_{k-\tilde{p}-3}} dt_{k-\tilde{p}-2} f((t)_{k-\tilde{p}-1}, 0, \dots, 0, x) \right\} \end{aligned}$$

ここで第一項に帰納法の仮定を用いねば,

$$\begin{aligned} & = \int_0^t \int_0^{t-t_1-\dots-t_{k-\tilde{p}-2}} dt_{k-\tilde{p}-1} \partial_{t_{k-\tilde{p}}}^{l_0+1} f((t)_{k-\tilde{p}}, 0, \dots, 0, x) + \left[ \sum_{i=0}^{l_0-1} \partial_t^i \partial_{t_{k-\tilde{p}}}^{l_0-1-i} \int_0^t \int_0^{t-\dots-t_{k-\tilde{p}-3}} dt_{k-\tilde{p}-2} \partial_{t_{k-\tilde{p}}} f \right. \\ & \left. (t)_{k-\tilde{p}}, 0, \dots, 0, x) \right] + \partial_t^{l_0} \int_0^t \int_0^{t-\dots-t_{k-\tilde{p}-3}} dt_{k-\tilde{p}-2} f((t)_{k-\tilde{p}-1}, 0, \dots, 0, x) \\ & = \int_0^t \int_0^{t-\dots-t_{k-\tilde{p}-2}} dt_{k-\tilde{p}-1} \left[ \partial_{t_{k-\tilde{p}}}^{l_0+1} f \right]_{t_k=\dots=t_{k-\tilde{p}+1}=0} + \left[ \sum_{i=0}^{l_0} \partial_t^i \partial_{t_{k-\tilde{p}}}^{l_0-i} \int_0^t \int_0^{t-\dots-t_{k-\tilde{p}-3}} dt_{k-\tilde{p}-2} f \right]_{t_k=\dots=t_{k-\tilde{p}}=0} \end{aligned}$$

となる。  $l = l_0 + 1$  の場合が言える。次に  $3^\circ$  は  $\tilde{p}$  に関する帰納法で証明する。  $\tilde{p} = 0$  に対しては明らかである。  $0 \leq \tilde{p} \leq \tilde{p}_0$  に対し  $2^\circ$  が成立したとすると,  $2^\circ$  より帰納法の仮定を用いて,

$$\begin{aligned} h_{m-\tilde{p}-1}(\tau_k, \dots, \tau_{k-\tilde{p}-1}) &= \frac{1}{\tau_{k-\tilde{p}-1} - \tau_{k-\tilde{p}}} (h_{m-\tilde{p}}(\tau_k, \dots, \tau_{k-\tilde{p}+1}, \tau_{k-\tilde{p}-1}) - h_{m-\tilde{p}}(\tau_k, \dots, \tau_{k-\tilde{p}})) = \\ &= \frac{1}{\tau_{k-\tilde{p}-1} - \tau_{k-\tilde{p}}} \left( \sum_{1 \leq j_1 < \dots < j_{\tilde{p}} \leq m} (\tau_{k-\tilde{p}-1} + \lambda_{\sigma(i)}) \dots (\tau_{k-\tilde{p}-1} + \lambda_{\sigma(j_{i-1})}) \cdot 1_{j_i} \cdot (\tau_{k-\tilde{p}+1} + \lambda_{\sigma(j_{i+1})}) \dots \times \right. \\ & \left. \times (\tau_k + \lambda_{\sigma(m)}) - \sum_{1 \leq j_1 < \dots < j_{\tilde{p}} \leq m} (\tau_{k-\tilde{p}} + \lambda_{\sigma(i)}) \dots (\tau_{k-\tilde{p}} + \lambda_{\sigma(j_{i-1})}) \cdot 1_{j_i} \cdot (\tau_{k-\tilde{p}+1} + \lambda_{\sigma(j_{i+1})}) \dots (\tau_k + \lambda_{\sigma(m)}) \right) \Bigg|_{1_{j_1} = \dots = 1_{j_{\tilde{p}}} = 1} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 &= \sum_{1 \leq j_1 < \dots < j_p \leq m} \left( \frac{(\tau_{k-\tilde{p}-1} + \lambda_{\sigma(1)}) \dots (\tau_{k-\tilde{p}-1} + \lambda_{\sigma(j_1-1)}) - (\tau_{k-\tilde{p}} + \lambda_{\sigma(1)}) \dots (\tau_{k-\tilde{p}} + \lambda_{\sigma(j_1-1)})}{\tau_{k-\tilde{p}-1} - \tau_{k-\tilde{p}}} \right) \times \\
 &\times 1_{j_1} (\tau_{k-\tilde{p}+1} + \lambda_{\sigma(j_1+1)}) \dots (\tau_k + \lambda_{\sigma(m)}) \Big|_{1_{j_1} = \dots = 1_{j_p} = 1} = \\
 &= \sum_{1 \leq j_1 < \dots < j_p \leq m} \left( \sum_{1 \leq j_0 < j_1} (\tau_{k-\tilde{p}-1} + \lambda_{\sigma(1)}) \dots (\tau_{k-\tilde{p}-1} + \lambda_{\sigma(j_0-1)}) 1_{j_0} (\tau_{k-\tilde{p}} + \lambda_{\sigma(j_0+1)}) \dots (\tau_{k-\tilde{p}} + \lambda_{\sigma(j_1-1)}) \right) \Big|_{1_{j_0} = 1} \times \\
 &\times 1_{j_1} (\tau_{k-\tilde{p}+1} + \lambda_{\sigma(j_1+1)}) \dots (\tau_k + \lambda_{\sigma(m)}) \Big|_{1_{j_1} = \dots = 1_{j_p} = 1}
 \end{aligned}$$

となつて  $p = \tilde{p}_0 + 1$  の場合が言えた。 (証明終)

系 3.1 任意の置換  $\sigma$  に対し, 上の補題 3° に於る  $h_p$  の表示に用いられる各項は,  $\tau_k, \dots, \tau_{k-m+p}, \xi$  に関して  $p$  次斉次であるが, さらに  $(\tau_k + \lambda_{\sigma(m)}), (\tau_{k-1} + \lambda_{\sigma(m-1)}), \dots, (\tau_{k-m+p} + \lambda_{\sigma(p)})$  のどれかを因子として唯一個含む。しかもこのとき,  $\tau_{k-\mu} + \lambda_{\sigma(m-\mu)}$  ( $0 \leq \mu \leq m-p$ ) の係数は,  $\tau$ -変数に関して言えば,  $\tau_{k-m+p}, \dots, \tau_{k-\mu}$  に関する多項式で, その係数は  $\mathbb{Q} \times \mathbb{Q}^*$  で正則である。

[証明] 上の補題の 3° に於る和を (但し  $p = m - \tilde{p}$  と置く),  $j_{m-p} < m$  なる項,  $j_{m-p} = m, j_{m-p-1} < m-1$  なる項,  $\dots, j_{m-p} = m, j_{m-p-1} = m-1, \dots, j_{m-p-\mu} = m-\mu, j_{m-p-\mu-1} < m-\mu-1$  なる項,  $\dots, j_{m-p} = m, j_{m-p-1} = m-1, \dots, j_1 = p+1$  なる項の和に等とめ直せば良い。 (証明終)

系 3.2  $\left[ h_{m-\tilde{p}}(t, x; \partial_{t_k} \phi_k, \dots, \partial_{t_{k-\tilde{p}}} \phi_k, \partial_x \phi_k) \right]_{t_k = \dots = t_{k-\tilde{p}+1} = 0} = 0, 0 \leq \tilde{p} \leq m-1$

[証明] 系 3.1 より ( $\tilde{p} = m-p$  と置いて),  $\left[ \partial_{t_{k-\mu}} \phi_k + \lambda_{k-\mu}(t, x; \partial_x \phi_k) \right]_{t_k = \dots = t_{k-\tilde{p}+1} = 0} = 0$  ( $0 \leq \mu \leq \tilde{p}$ ) と言えよ。但し,  $\sigma$  は  $\lambda_{\sigma(i)} = \lambda_{k+i-m}, 1 \leq i \leq m$  なるものとする。  $\partial_{t_{k-\mu}} \phi_k(t_k, x)$  は補題 2.2 より計算されるが, さらに  $\left[ (X^\nu, \Xi^\nu)(t_k, x) \right]_{t_k = \dots = t_{k-\tilde{p}+1} = 0} = (X^{k-\tilde{p}}, \Xi^{k-\tilde{p}})(t_{k-\tilde{p}}, x)$  に注意すれば, 求める等式が従う。 (証明終)

さて、(U) の右辺に H を作用させ、誘導作用素を用いて形式的に整理すれば次の式が得られる。

$$\begin{aligned}
 (HU) \quad & \sum_{p=0}^m [H_p^{m+1-p} F_{m+1-p}]_{t_{m+1-p}=\dots=t_2=0} + \sum_{k=m+2}^{\infty} \int_0^t dt_1 \dots \int_0^{t-t_1} dt_{k-m-1} \sum_{p=0}^m [H_p^{k-p} F_{k-p}]_{t_{k-p}=\dots=t_{k-m+1}=0} = \\
 & = [F_{m+1}]_{t_{m+1}=\dots=t_2=0} + \sum_{p=1}^m [H_p^{m+1-p} F_{m+1-p}]_{t_{m+1-p}=\dots=t_2=0} + \\
 & + \sum_{k=m+2}^{\infty} \int_0^t dt_1 \dots \int_0^{t-t_1} dt_{k-m-1} ([F_k]_{t_k=\dots=t_{k-m+1}=0} + \sum_{p=1}^m [H_p^{k-p} F_{k-p}]_{t_{k-p}=\dots=t_{k-m+1}=0})
 \end{aligned}$$

§4 擬微分作用素 複素解析的関数に作用する擬微分作用素は、Bony-Shapira [1] に於て正則関数に作用するものとして定義されているが、Kobayashi [6] はそれを §3 (U) のような展開をもつ特異性を有する関数の族にまで拡張した。

ここでは [6] の中から、後の議論に必要な定義と命題のみを証明抜きで掲げる。証明は [6] を参照せよ。

$X$  は  $\mathbb{C}^m$  の原点  $0$  を含む領域とし、その点を  $x = (x_1, \dots, x_m)$  で表わす。 $X$  で正則関数の全体を  $\mathcal{O}(X)$  で表わし、その可算個の積集合  $\prod_{j=-\infty}^{\infty} \mathcal{O}_j$ ,  $\mathcal{O}_j = \mathcal{O}(X)$  に普通の  $\mathcal{O}(X)$ -加群の構造を入れた空間を  $\mathcal{D}(X)$  で表わす。 $\mathcal{D}(X)$  の元は、 $u = (u_j)_{j \in \mathbb{Z}} = (u_j)$  など表わすことにある。

定義 4.1 §3 に於て与えられた  $f_j, j \in \mathbb{Z}$  と、 $\phi \in \mathcal{D}(X)$  s.t.  $\phi(0) = 0$ ,  $\partial_x \phi \neq 0$  に対し、 $(\{f_j\}, \phi)$  に関する 形式的係数空間  $\mathcal{F}(X) = \mathcal{F}(\{f_j\}, \phi; X)$  を、 $\mathcal{F}(X) \equiv \{u = (u_j) \in \mathcal{D}(X);$   
 任意の  $K \ll X, \varepsilon > 0$  に対し、適当な  $B = B(K) > 0, S = S(K) > 0,$

$C = C(K, \varepsilon) > 0$  が存在して,  $\|u_j\|_K \leq B j! S^j, j \geq 0, \|u_{-j}\|_K \leq C \varepsilon^j / j!, j \geq 1$  が成り立つ } により定義する。形式的係数空間  $\mathcal{F}(\{f_j\}, \phi; X)$  に対し, 射影  $\pi = \pi(\{f_j\}, \phi)$  を  $\mathcal{F}(X) \ni u = (u_j) \rightarrow \pi(u) = \sum_{j=-\infty}^{\infty} f_j(\phi) u_j$  により定義する。

命題 4.1  $u \in \mathcal{F}(X)$  ならば,  $\pi(u)$  は  $\mathbb{C}^n$  の原点の十分小さな近傍から  $\{\phi=0\}$  を除いた開集合の上で正規収束する。また逆に,  $\sum_{j=-\infty}^{\infty} f_j(\phi) u_j$  が  $\mathbb{C}^n$  の原点の近傍から  $\{\phi=0\}$  を除いた開集合の上で正規収束するならば, 適当な  $\tilde{X}$  に対し  $(u_j) \in \mathcal{F}(\tilde{X})$ 。

注意 4.1 我々が  $(u_j) \in \mathcal{F}(X)$  を考える際には, いつも  $\pi((u_j)) = \sum f_j(\phi) u_j$  が念頭にあるのだが, 右辺の関数に対し  $\mathcal{F}(X)$  の元による表現は一通りでしかない。以下に述べるように微分作用素は関数に作用するが, 擬微分作用素は  $\mathcal{F}(X)$  の元に作用する ([6] 参照)。

定義 4.2  $\mathcal{F}(\{f_j\}, \phi; X)$  に対し, その上に作用する 偏微分作用素  $\partial_{x_i} : \mathcal{F}(X) \rightarrow \mathcal{F}(X)$  を,  $\partial_{x_i}(u_j) = (v_j), v_j = (\partial_{x_i} \phi) \cdot u_{j+1} + \partial_{x_i} u_j$  により定義する。また, これに基づいて一般の偏微分作用素  $a(x; \partial_x) = \sum_{|\alpha| \leq m} a_\alpha(x) \partial_x^\alpha : \mathcal{F}(X) \rightarrow \mathcal{F}(X)$ , 但し  $a_\alpha(x) \in \mathcal{O}(X)$ , も定義される。

命題 4.2 微分作用素  $a(x; \partial_x)$  と  $u = (u_j) \in \mathcal{F}(X)$  に対し,

(1)  $\pi(a(x; \partial_x) u) = a(x; \partial_x) \pi u = a(x; \partial_x) \sum f_j(\phi) u_j$

(2)  $a(x; \partial_x)(u_j) = (v_j)$  と置けば,  $v_j(x) = \sum_{\beta=0}^m \sum_{\alpha \geq 0} \sum_{\nu \geq 0} \frac{1}{\alpha! \nu!} x$

$$\times a_g^{(\alpha)}(x; \partial_x \phi) \left[ \partial_x^\alpha (\tilde{\phi}(x; \tilde{x}))^\nu u_{j+g-|\alpha|+\nu}(x) \right]_{\tilde{x}=x}, \text{ 但し, } a_g(x; \xi) \\ \text{は } a(x; \xi) \text{ の } g \text{ 次斉次部分, } a_g^{(\alpha)}(x; \xi) = (\partial_\xi^\alpha a_g)(x; \xi), \text{ また,} \\ \tilde{\phi}(x; \tilde{x}) = \phi(x) - \phi(\tilde{x}) - \sum_{i=1}^n (\partial_{x_i} \phi)(\tilde{x}) \cdot (x_i - \tilde{x}_i) \text{ とする。}$$

注  $\tilde{\phi}$  の定義から,  $\nu_j$  を与える式に於ける  $\nu$  の和は,  $0 \leq 2\nu \leq |\alpha|$  の範囲で良いことがわかる。

定義 4.3  $\omega$  は  $\mathbb{C}^n$  の領域とする。形式的な無限和  $p(x; \xi) = \sum_{g=-\infty}^m p_g(x; \xi)$  ( $m \in \mathbb{Z}$ ) が  $X \times \omega$  に於ける擬微分作用素の表象であるとは次の (1), (2) がみたされる時に言う。

- (1) 各  $p_g(x; \xi)$  は,  $X \times \omega$  で正則かつ  $\xi$  に関して  $g$  次斉次
- (2) 任意の  $\tilde{K} \Subset X \times \omega$  に対し, 適当な  $C = C(\tilde{K}) > 0$  と  $B = B(\tilde{K}) > 0$  が存在して,  $\|p_{m-g}\|_{\tilde{K}} \leq C \cdot B^g g!$  ( $g = 0, 1, 2, \dots$ ) なる評価がみたす。

$X \times \omega$  に於ける擬微分作用素の表象全体の集合を  $\mathcal{P}(X \times \omega)$  で表わす。  $m$  を  $p$  の次数といい, 次数  $m$  の表象全体の集合を  $\mathcal{P}^m(X \times \omega)$  で表わす。

定義 4.4 定義 4.1 の  $\phi \in \mathcal{D}(X)$  が, さらに  $\partial_x \phi(0) \in \omega$  をみたすとき,  $p(x; \xi) = \sum_{g=-\infty}^m p_g(x; \xi) \in \mathcal{P}^m(X \times \omega)$  に対応する,  $\mathcal{F}(1f_j), \phi; X$  の上に作用する擬微分作用素  $p(x; \partial_x): \mathcal{F}(X) \rightarrow \mathcal{F}(X)$  を,  $p(x; \partial_x)(u_j) = (v_j)$ ,  $v_j(x) = \sum_{g=-\infty}^m \sum_{\alpha \geq 0} \sum_{\nu \geq 0} \frac{1}{\alpha! \nu!} p_g^{(\alpha)}(x; \partial_x \phi) \times \left[ \partial_x^\alpha (\tilde{\phi}(x; \tilde{x}))^\nu u_{j+g-|\alpha|+\nu}(x) \right]_{\tilde{x}=x}$  により定義する。

注 この場合も  $\nu$  に関する和は  $0 \leq 2\nu \leq |\alpha|$  で良い。

命題 4.3  $(u_j) \in \mathcal{F}(\{t_j\}, \phi; X)$  に対し, 上の定義による  $(v_j)$  はやはり同じ  $\mathcal{F}(\{t_j\}, \phi; X)$  に属する。

次の合成表象と擬微分作用素の合成の命題は重要である。

定義 4.5  $\mathcal{P}(X \times \omega)$  のふたつの表象  $p(x; \xi) = \sum_{\xi=-\infty}^{m_1} p_\xi(x; \xi)$ ,  $r(x; \xi) = \sum_{\xi=-\infty}^{m_2} r_\xi(x; \xi)$  に対し, その合成表象  $(p \circ r)(x; \xi) = S(x; \xi) = \sum_{\xi=-\infty}^{m_1+m_2} S_\xi(x; \xi) \in \mathcal{P}(X \times \omega)$  を,  $S_\xi(x; \xi) = \sum_{\substack{\xi_1+\xi_2=\xi \\ \alpha \geq 0}} \frac{1}{\alpha!} p_{\xi_1}^{(\alpha)}(x; \xi) r_{\xi_2}^{(\alpha)}(x; \xi)$  により定義する。但し,  $r_{\xi_2}^{(\alpha)}(x; \xi) = (\partial_x^\alpha r_{\xi_2})(x; \xi)$  である。

命題 4.4  $p = \sum_{\xi=-\infty}^{m_1} p_\xi$ ,  $r = \sum_{\xi=-\infty}^{m_2} r_\xi \in \mathcal{P}(X \times \omega)$  とする。  
 (1)  $S = p \circ r$  は  $\mathcal{P}^{m_1+m_2}(X \times \omega)$  に属する。  
 (2)  $u \in \mathcal{F}(\{t_j\}, \phi; X)$  に対し, 合成法則  $(p \circ r)(x; \partial_x) u = p(x; \partial_x) \circ r(x; \partial_x) u$  が成り立つ。

§ 5 輸送方程式 この節では, § 3 に与えた形式解 (U) に於ける未知関数  $F_k(t_k, x)$  即ち  $a_{j,k}(t_k, x)$  を求める手続きについて論ずる。§ 3 の終りで (HU) を得たが, 未知関数に対する最初の情報として我々はこの式の各項を 0 に等しく置く。

$$(T)_k^0 [F_k]_{t_k=\dots=t_{k-m+1}=0} + \sum_{p=1}^m [H_p^{k-p} F_{k-p}]_{t_{k-p}=\dots=t_{k-m+1}=0} = 0, \quad k = m+1, m+2, \dots$$

また, 初期条件から得られる情報を記述するため,  $I_\ell(\partial t) \equiv \partial t^\ell$  と置き,  $I_\ell$  に対する誘導作用素を  $I_{\ell,p}^k(\partial t_k, \dots, \partial t_{k-\ell+p})$ ,  $0 \leq p \leq \ell$  で表わす。このとき形式的な手続きによる初期条件は,

$$(T)_k^0 [F_k]_{t_k=\dots=t_1=0} + \sum_{p=1}^{k-1} [I_{k-1,p}^{k-p} F_{k-p}]_{t_{k-p}=\dots=t_1=0} = F_k^0(x), \quad k = 1, \dots, m$$

と表わされる。但し,  $F_k^0(x) = \delta_{k, l_0+1}^{(x)} / x_1^p$  である。

定義 5.1 我々は, 上のふたつを合わせたもの, 即ち  $(T)_k^0$ ,  $k=1, 2, \dots$  を, それぞれの  $F_k$ ,  $k=1, 2, \dots$  に対する 0-番目の輸送方程式 と呼ぶ。

我々は  $(T)_k^0$  を,  $[F_k(t)_k, x]$  を  $F_{k-p}$ ,  $p \gg 1$  によって表わす式であると考へ, なお  $F_k(t)_k, x$  の  $t_k, \dots, t_{\max(k-m+1, 1)}$  変数に関する制限をひとつひとつ解除して行くために, 次の擬微分方程式系を与える。

定義 5.2  $F_k$  に対する  $l$ -番目の輸送方程式  $(T)_k^l$ ,  $l=1, \dots, \min(k, m)$  を次の式により定義する。

$$(T)_k^l \left( \partial_{t_l} + \lambda_l(t_1 + \dots + t_l, x; \partial_x) \right) [F_k]_{t_k = \dots = t_{l+1} = 0} = 0, \quad \begin{array}{l} k=1, \dots, m \text{ に対し} \\ l=1, \dots, k \end{array}$$

$$(T)_k^l \left( \partial_{t_{k-m+l}} + \lambda_{k-m+l}(t_1 + \dots + t_l, x; \partial_x) \right) [F_k]_{t_k = \dots = t_{k-m+l+1} = 0} = 0, \quad \begin{array}{l} k=m+1, m+2, \dots \text{ に対し} \\ l=1, \dots, m \end{array}$$

$(T)_k^l$ ,  $l=0, 1, \dots, \min(k, m)$  を総称して  $F_k$  に対する輸送方程式系と呼ぶ。

注 擬微分作用素が作用するのは形式的係数空間であり,  $F_k$  もその元として考へている。しかし我々は,  $\pi F_k$  の形式的係数空間に於る他の表現については考へないので, 以後  $F_k$  と  $\pi F_k$  とは区別せずに用いることにする。

輸送方程式系を  $k=1$  から順番に解くことにより, 形式的には  $F_k(t)_k, x$  を求める手続きが与えられた。しほらくこの手続きを観察してみよう。まず,  $\{(T)_k^l, l=0, \dots, \min(k, m)\}$  を  $k=1$  から

順に見て行くことにより,  $F_k$  が一階の非特性的擬微分作用素に対する特異初期値問題を,  $\min(k, m)$  回解くことにより得られる, ということを知ることもできる。このことから,  $F_k$  は (U) に於て与えられた展開の形式を持つこと, 特に  $\phi_k$  が多重特性関数であることが従う。いいかえれば, 輸送方程式系の定義から  $F_k$  の展開の形は決定される。しかし, 逆に (U) に於るような展開の形をもつ  $F_k$  の定め方は幾通りもある。例えば [5] に於る定め方は, 擬微分作用素を用いたやり方であり, [6] では, 特性根が包含的な場合には, より良い定め方を与えている。

$1 \leq l$ -番目の輸送方程式の効果は, 次の補題で示される。

補題 5.2  $\{F_k\}_{k=1,2,\dots}$  が  $\{(T)_k^l, l=0, \dots, \min(k, m)\}$  をみたすならば,  $F_k, k \geq m+1$  の  $l$ -番目の輸送方程式の次数を 1 だけ下げることができる。即ち,  $(T)_k^l$  に於て,  $l$  階偏微分作用素  $H_p^{k-p}$  に対し適当な  $l-1$  階擬微分作用素  $\tilde{H}_p^{k-p}(t, x; \partial_{t_{k-p}}, \dots, \partial_{t_{k-m}}, \partial_x)$  が存在して,  $[H_p^{k-p} F_{k-p}]_{t_{k-p}=\dots=t_{k-m+1}=0} = [\tilde{H}_p^{k-p} F_{k-p}]_{t_{k-p}=\dots=t_{k-m+1}=0}$  をみたす。

[証明]  $H_p^{k-p}$  の主部  $h_p^{k-p} = h_p(t, x; \tau_{k-p}, \dots, \tau_{k-m}, \xi)$  に対し, 系 3.1 を適用する。但し,  $\sigma$  は  $\lambda_{k-p-\mu} = \lambda_{\sigma(m-\mu)}, \mu = 0, \dots, m-p$  を与える任意の置換とする。従って,  $h_p(t, x; \tau_{k-p}, \dots, \tau_{k-m}, \xi) = \sum_{\mu=0}^{m-p} e_{p,\mu}(t, x; \tau_{k-p-\mu}, \dots, \tau_{k-m}, \xi) (\tau_{k-p-\mu} + \lambda_{k-p-\mu}(t, x; \xi))$  なる表示が得られる。ここに  $e_{p,\mu}$  は,  $\tau$ -変数についての多項式,  $(t, \xi)$ -

変数に関しては  $p-1$  次同次で,  $(t, x; \xi)$  に関しては  $\Omega \times \Omega^*$  で正則な関数である。いま, 擬微分作用素  $e_{p,\mu}(t, x; \partial_{t_{k-p-\mu}}, \dots, \partial_{t_{k-m}}, \partial_x)$

$$\begin{aligned} & \circ (\partial_{t_{k-p-\mu}} + \lambda_{k-p-\mu}(t, x; \partial_x)) \text{ を持ち込むと, これに対し } [e_{p,\mu}^{k-p} \circ \\ & \circ (\partial_{t_{k-p-\mu}} + \lambda_{k-p-\mu}) F_{k-p}]_{t_{k-p}=\dots=t_{k-m+1}=0} = [e_{p,\mu}^{k-p} \circ (\partial_{t_{k-p-\mu}} + \lambda_{k-p-\mu}) \cdot \\ & \cdot [F_{k-p}]_{t_{k-p}=\dots=t_{k-p-\mu+1}=0}]_{t_{k-p-\mu}=\dots=t_{k-m+1}=0} = 0 \text{ が成り立つ。但し,} \end{aligned}$$

ここで  $F_{k-p}$  に対する  $m-\mu$  番目の輸送方程式を適用する。故に

$$[H_p^{k-p} F_{k-p}]_{t_{k-p}=\dots=t_{k-m+1}=0} = \left[ \left( H_p^{k-p} - \sum_{\mu=0}^{m-p} e_{p,\mu}^{k-p} \circ (\partial_{t_{k-p-\mu}} + \lambda_{k-p-\mu}) \right) F_{k-p} \right]_{t_{k-p}=\dots=t_{k-m+1}=0}$$

を得る。ところで,  $\sum_{\mu=0}^{m-p} e_{p,\mu}^{k-p} \circ (\partial_{t_{k-p-\mu}} + \lambda_{k-p-\mu})$  の表象は定義 4.

5 の同次表象展開をもつが, その最大次数  $p$  次斉次の部分は

$$h_p^{k-p} \text{ に等しいから, } \tilde{H}_p^{k-p} \equiv H_p^{k-p} - \sum_{\mu=0}^{m-p} e_{p,\mu}^{k-p} \circ (\partial_{t_{k-p-\mu}} + \lambda_{k-p-\mu})$$

と置けば,  $\tilde{H}_p^{k-p}$  は  $p-1$  次擬微分作用素で命題の条件をみたす。

(証明終)

定義 5.2'  $k \geq m+1$  に対する  $(T)_k^0$  に於て,  $H_p^{k-p}$  上の  $\tilde{H}_p^{k-p}$  で置き換えた式を  $(\tilde{T})_k^0$  で表わし, やはり 0-番目の輸送方程式 と呼ぶ。また,  $(T)_k^0$  を  $(\tilde{T})_k^0$  で置きかえた輸送方程式系  $(\tilde{T})_k^l$ ,  $l=0, \dots, m$  をやはり 輸送方程式系 と呼ぶ。今後輸送方程式とは, 特に断わらない限りこの意味のものとする。

§ 6 優関数評価 この節では, 輸送方程式系をみたす

$F_k$  をその展開  $F_k(t)_k, x) = \sum_j f_j(\phi_k(t)_k, x) a_{j,k}(t)_k, x)$  の各係数  $a_{j,k}(t)_k, x)$  を定めることにより決定し, 同時に  $a_{j,k}$  の優関数

評価を求めらる。まず、§4で与えた擬微分作用素の定義と命題とを用いて、輸送方程式系を  $a_{j,k}$  に関するものに書きかえる。

$$(A)_{j,k}^0 [a_{j,k}]_{t_k = \dots = t_{k-m+1} = 0} + \sum_{p=1}^m \left[ \sum_{\beta=-\infty}^{p-1} \sum_{0 \leq \alpha \leq 2\nu \leq |\alpha|} \frac{1}{\alpha! \nu!} (\tilde{H}_{p,q}^{k-p})^{(\alpha)}(t, x; \partial_{t_*} \phi_{k-p}, \partial_x \phi_{k-p}) \times \left[ \partial_{(t_*, x)}^\alpha (\tilde{\phi}_{k-p}((t)_{k-p}, x; (\tilde{t})_{k-p}, \tilde{x}))^\nu a_{j+\beta-|\alpha|+\nu, k-p}((t)_{k-p}, x) \right] \right] = 0,$$

( $k \geq m+1$ ) 但し,  $\tilde{\cdot} = \tilde{\cdot} = \tilde{H}_{p,q}^{k-p}(t, x; t_{k-p}, \dots, t_{k-m}, \tilde{\cdot})$  は、擬微分作用素  $\tilde{H}_p^{k-p}$  の表象の同次関数展開の  $p$  次斉次部分である。また、

$(t_*)$  は  $(t_{k-p}, \dots, t_{k-m})$  を表わし、 $\tilde{\phi}_{k-p}$  は定義 4.4 に於て  $\phi$  を  $\phi_{k-p}$  に置かえて得らる  $\tilde{\phi}$  である。また、 $1 \leq k \leq m$  に対しは、

$$(A)_{j,k}^0 [a_{j,k}]_{t_k = \dots = t_1 = 0} + \sum_{p=1}^{k-1} \left[ \sum_{0 \leq \alpha \leq 2\nu \leq |\alpha|} \frac{1}{\alpha! \nu!} (I_{k-1,p}^{k-p})^{(\alpha)}(\partial_{t_*} \phi_{k-p}) \cdot \left[ \partial_{(t_*, x)}^\alpha \tilde{\phi}_{k-p}((t)_{k-p}, x; (\tilde{t})_{k-p}, \tilde{x})^\nu a_{j+p-|\alpha|+\nu, k-p}((t)_{k-p}, x) \right] \right] = \delta_{k, l+1} \delta_{j, -1} \times (-1)^{p-1} C(x) / (p-1)!$$

を得る。但し、 $\tilde{\cdot} = \tilde{\cdot} = (t_*)$  は  $(t_{k-p}, \dots, t_1)$  を表わす。さらに  $l = 1, \dots, \min(k, m)$  に対し、次を得る。

表わす。さらに  $l = 1, \dots, \min(k, m)$  に対し、次を得る。

$$(A)_{j,k}^l \partial_{t_{k-m+l}} [a_{j,k}((t)_k, x)]_{t_k = \dots = t_{k-m+l+1} = 0} + \sum_{|\alpha| \geq 1} \sum_{0 \leq 2\nu \leq |\alpha|} \frac{1}{\alpha! \nu!} \lambda_{k-m+l}^{(\alpha)}(t, x; \partial_x \phi_{k-m+l}) \times \left[ \partial_x^\alpha \tilde{\phi}_{k-m+l}((t)_{k-m+l}, x; (\tilde{t})_{k-m+l}, \tilde{x})^\nu [a_{j+1-|\alpha|+\nu, k}((t)_k, x)]_{t_k = \dots = t_{k-m+l+1} = 0} \right] = 0,$$

( $k \geq m+1$ )、但しここで系 2.1 と  $(\Phi)$  が陰に用いられてゐる。

$$(A)_{j,k}^l \partial_{t_l} [a_{j,k}((t)_k, x)]_{t_k = \dots = t_{l+1} = 0} + \sum_{|\alpha| \geq 1} \sum_{0 \leq 2\nu \leq |\alpha|} \frac{1}{\alpha! \nu!} \lambda_l^{(\alpha)}(t, x; \partial_x \phi_l) \times \left[ \partial_x^\alpha \tilde{\phi}_l((t)_l, x; (\tilde{t})_l, \tilde{x})^\nu [a_{j+1-|\alpha|+\nu, k}((t)_k, x)]_{t_k = \dots = t_{l+1} = 0} \right] = 0 \quad (k=1, \dots, m)$$

定義 6.1  $k \geq 1, -\infty < j < \infty$  に対する  $(A)_{j,k}^l, l = 0, 1, \dots, \min(k, m)$  を、 $a_{j,k}((t)_k, x)$  に対する 輸送方程式系 といひ、各  $(A)_{j,k}^l$  へ、 $a_{j,k}$  に対する  $l$ -番目の輸送方程式 といふ。

我々は  $(A)_{j,k}^l$  により  $a_{j,k}((t)_k, x)$  を定めるのが、 $k \leq k-1$  には

対する全ての  $a_{\eta, k}$  と,  $\eta \leq j-1$  に対する全ての  $a_{\eta, k}$  が与えられた時  $a_{j, k}$  が一意的に定められることは明らかであろう。  $a_{j, k}$

を定めるために  $(A)_{j, k}^l, l=0, \dots, m_1 = \min(k, m)$  に登場する  $a_{\eta, k}$  は,  $(A)_{j, k}^0$  に於ては  $\max(1, k-m) \leq k \leq k-1, \eta \leq j+k-k-1$  であり,  $(A)_{j, k}^l, 1 \leq l \leq m_1$  に於ては  $k=k, \eta \leq j-1$  である (図 6.1 の斜線部)。

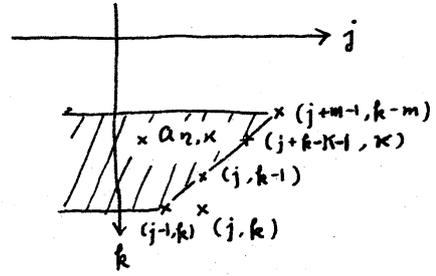


図 6.1

この事実と  $(A)_{j, k}^0 (1 \leq k \leq m)$  の与え方とから,  $a_{j, k}$  の中には実は  $\equiv 0$  と置いて構わない多くと  $(j, k)$  が存在することがわかる。図 6.2 の斜線部の外側にある  $(j, k)$  がこのような添数にあたるが, 精密に記述するため次の関数を導入する。

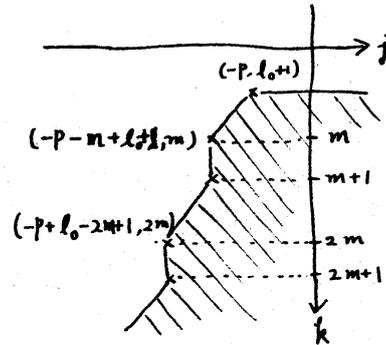


図 6.2

定義 6.2 添数関数  $N(j, k)$  を次の式で定義する。

$$N(j, k) = j + \left[ \frac{m-1}{m} k \right], \quad j, k \in \mathbb{Z}$$

このとき,  $N(j+p-l_0, k) < 0$  なる  $(j, k)$  及び  $k < l_0+1$  なる  $(j, k)$  に対し,  $a_{j, k} \equiv 0$  と置くことができる。

規約 6.1  $N(j+p-l_0, k) < 0$  なる  $(j, k)$  及び  $k < l_0+1$  なる  $(j, k)$  に対し  $a_{j, k} \equiv 0$  と定める。

さて, 優関数評価のために次の関数を準備する。

定義 6.3  $\Theta_N(r, t) = \left( \frac{d}{dt} \right)^N \frac{1}{r-t} = \frac{N!}{(r-t)^{N+1}}, \quad N=0, 1, 2, \dots$

と置く。  $N$  をこの関数の指数と呼ぶ。

命題 6.1  $\Theta_N(r, t)$  は次の性質を満たす。 1°  $\frac{d}{dt} \Theta_N = \Theta_{N+1}$ ,  
 2°  $\Theta_N \ll \frac{r}{N+1} \Theta_{N+1}$ , 従って  $N_1 \leq N_2$  に対し  $\Theta_{N_1} \ll \frac{N_1!}{N_2!} r^{N_2-N_1} \Theta_{N_2}$ ,  
 3°  $u(x) \ll \Theta_N(s)$ ,  $s = \rho x_0 + \sum_{i=1}^n x_i$  ならば,  $\forall \beta = (\beta_0, \dots, \beta_n) \in \mathbb{N}^{n+1}$   
 に対し  $\partial_x^\beta u(x) \ll \rho^{|\beta|} \Theta_{N+|\beta|}$ , 4°  $L > r$  ならば  
 $\frac{1}{L-t} \Theta_N(r, t) \ll \frac{1}{L-r} \Theta_N(r, t)$

証明略

定理 6.1 次の優関数評価を満たすように  $a_{j,k}((t)_k, x)$  を定めるところができる。  
 (A)  $a_{j,k}((t)_k, x) \ll C_0 C_1^{j_1+k} \Theta_{N(j_1, k)}(r, s)$   
 但し,  $s = \rho \sum_{l=1}^k t_l + \sum_{i=1}^n x_i$ ,  $\rho, C_0, C_1, r$  は  $j, k$  による適当な  
 正定数, また  $j_1 = j + p - l$  である。

証明は輸送方程式系 (A) <sub>$j, k$</sub>  から優方程式系を導き出し, (A) がその解となるように定数連を定めることができるということと, 帰納法を用いて証明する, という方針で行う。このためにまず, 優関数評価に関する補題をいくつか掲げる。

補題 6.1  $f(x, y)$  は  $(x, y) \in \mathbb{C}^n \times \mathbb{C}^m$  の原点の近傍で正則な関数とし,  $f(x, y) \ll F(x, y)$  とする。このとき,  $y_j = \phi_j(x)$  が  $\phi_j(0) = 0$ ,  $1 \leq j \leq m$  を満たし, かつ  $\Phi_j(0) = 0$  ならば  $\Phi_j(x)$  に対し  $\phi_j(x) \ll \Phi_j(x)$ ,  $1 \leq j \leq m$  ならば,  $f(x, \phi(x)) \ll F(x, \Phi(x))$  が成立す。

証明略

補題 6.2 任意の  $i, p, \mu, k$  に対し, それらによる定数  $A, L > 0$  が存在し 2 次の優関数評価が成り立つ。

$$1^\circ (\partial_{\xi}^{\alpha} \partial_x^{\beta} \lambda_i)(t_1 + \dots + t_k, x; \partial_x \phi_k(t_k, x)) \ll \frac{A(|\alpha| + |\beta|)!}{(L - \sum_{\ell=1}^k t_{\ell} - \sum_{i=1}^n x_i)^{(|\alpha| + |\beta| + 1)}}$$

$$2^\circ \left[ (\partial_{(t_k, \xi)}^{\alpha} e_{p, \mu})(t_1 + \dots + t_{k-p}, x; \partial_{(t_k, x)} \phi_{k-p}(t_k, x)) \right]_{t_{k-p} = \dots = t_{k-m+1} = 0} \ll \frac{A|\alpha|!}{(L - \sum_{\ell=1}^{k-m} t_{\ell} - \sum_{i=1}^n x_i)^{|\alpha|}}$$

但し,  $e_{p, \mu}(t, x; t_k, \xi)$  は,  $h_p(t, x; t_{k-p}, \dots, t_{k-m}, \xi) = \sum_{\mu=0}^{m-p} e_{p, \mu}(t, x; t_{k-p-\mu}, \dots, t_{k-m}, \xi) (\tau_{k-p-\mu} + \lambda_{k-p-\mu}(t, x; \xi))$  により定義される (p15, 補題 5.2 の証明参照)。

[証明]  $1^\circ \phi_k(0_k, x) = x_1$  であるから, 補題 2.1 とより精密に

$$\text{した, } \phi_k(t_k, x) - x_1 \ll \frac{A_1}{L_1 - \sum_{\ell=1}^k t_{\ell} - \sum_{i=1}^n x_i} - \frac{A_1}{L_1 - \sum_{i=1}^n x_i} \text{ なる優評価}$$

が成り立つ ( $A_1, L_1 > 0$  は  $k$  による定数)。一方, 適当な  $A_2, L_2 > 0$

$$\text{に対し } \lambda_i(t_1 + \dots + t_k, x; \xi) \ll \frac{A_2}{L_2 - \sum_{\ell=1}^k t_{\ell} - \sum_{i=1}^n x_i - \sum_{i=1}^m (\xi - e)_i} \text{ が成り立つ}$$

から,  $(\xi - e)_i = (\partial_x \phi - e)_i \ll \frac{A_1}{L_1 - \sum_{\ell=1}^k t_{\ell} - \sum_{i=1}^n x_i} - \frac{A_1}{L_1 - \sum_{i=1}^n x_i}$  に対し補

題 6.1 を適用できる。その結果  $\lambda_i(\dots) \ll \frac{A_2}{L_2 - \sum_{\ell=1}^k t_{\ell} - \sum_{i=1}^n x_i - (\frac{nA_1}{L_1 - \sum_{\ell=1}^k t_{\ell} - \sum_{i=1}^n x_i} - \frac{nA_1}{L_1 - \sum_{i=1}^n x_i})}$

を得るから,  $A, L > 0$  を適当にとり直せば  $\lambda_i$  に対する求める

評価を得る。  $\lambda_i^{(\alpha)}$  に対する評価も同様である。  $2^\circ$  系 2.1

$$\text{及び補題 2.2 より } \left[ (\partial_{t_k} \phi_{k-p}(t_k, x), \partial_x \phi_{k-p}) \right]_{t_{k-p} = \dots = t_{k-m+1} = 0} = (-\lambda_*(t_1 + \dots + t_{k-m},$$

$$, \partial_x \phi_{k-m}(t_k, x)), \partial_x \phi_{k-m}) \text{ であるから, } e_{p, \mu}(\dots; \lambda_*(t_1 + \dots + t_{k-m}, \partial_x \phi_{k-m}), \partial_x \phi_{k-m})$$

に対し優評価すればよい。  $e_{p, \mu}(t, x; t_k, \xi)$  は  $k$  による関数

形とまつから, これを  $(t, x; t_k - \lambda_*(0, 0; e), \xi - e) \sim (0, 0; 0, 0)$  の

回りで展開することにより,  $k$  による定数  $A_3, L_3 > 0$  により

$$e_{p, \mu}(t_1 + \dots + t_{k-m}, x; t_k, \xi) \ll \frac{A_3}{L_3 - \sum_{\ell=1}^{k-m} t_{\ell} - \sum_{i=1}^n x_i - \sum_{* = k-m}^{k-p} (t_k - \lambda_*(0, 0; e)) - \sum (\xi - e)_i}$$

なる優評価が得られる。従って  $\tau_+ - \lambda_*(0,0;e) = \lambda_*(t_1+\dots+t_{k-m}, x; \partial_x \phi_{k-m}) - \lambda_*(0,0;e) \ll \frac{A_4}{L_4 - \sum_{i=1}^{k-m} t_i - \sum x_i} - \frac{A_4}{L_4}$ ,  $(\xi - e)_i = (\partial_x \phi_{k-m} - e)_i \ll \frac{A_5}{L_5 - \sum t_i - \sum x_i} - \frac{A_5}{L_5 - \sum x_i}$  に対し補題 6.1 を適用することができる (但し, 上の優評価には 1° の結果を用いている)。その結果  $e_{p,\mu}(t_1+\dots+t_{k-m}, x; -\lambda_*(\dots), \partial_x \phi_{k-m}) \ll \frac{A_3}{L_3 - \sum_{i=1}^{k-m} t_i - \sum x_i - (\frac{(m-p)A_4}{L_4 - \sum t_i - \sum x_i} - \frac{(m-p)A_4}{L_4}) - (\frac{nA_5}{L_5 - \sum t_i - \sum x_i} - \frac{nA_5}{L_5 - \sum x_i})}$  を得るから,  $A, L > 0$  と適当にとり直せば  $e_{p,\mu}$  に対する求める優評価を得る。 $e_{p,\mu}^{(\alpha)}$  に対する優評価も同様である。(証明終)

**補題 6.3**  $\alpha, \beta \in (N \cup \{0\})^n$  に対し, 次の等式が成立つ。  

$$\sum_{\substack{\beta \leq \alpha \\ |\alpha|=\lambda, |\beta|=\mu}} \frac{1}{\alpha!} \binom{\alpha}{\beta} = \frac{n^\lambda}{\lambda!} \binom{\lambda}{\mu}$$

[証明]  $\frac{((1+y_1)+\dots+(1+y_n))^\lambda}{\lambda!} = \sum_{|\alpha|=\lambda} \frac{1}{\alpha!} (1+y_1)^{\alpha_1} \dots (1+y_n)^{\alpha_n} = \sum_{|\alpha|=\lambda} \frac{1}{\alpha!} \sum_{\beta \leq \alpha} \binom{\alpha}{\beta} y_1^{\beta_1} \dots y_n^{\beta_n} = \sum_{\mu=1}^{\lambda} \sum_{\substack{\beta \leq \alpha \\ |\alpha|=\lambda, |\beta|=\mu}} \frac{1}{\alpha!} \binom{\alpha}{\beta} y_1^{\beta_1} \dots y_n^{\beta_n}$ , ここで,  $y_1 = \dots = y_n = y$  と置き, 両辺の  $y^\mu$  の係数と比較すればよい。(証明終)

**補題 6.4**  $\alpha, \beta \in (N \cup \{0\})^{n+l}$ ,  $|\alpha| = \lambda \geq 2\nu$  とする。 $(A)_{j,k}^l$  (定義 6.1) と記述する時用いられた  $\tilde{\Phi}_k$  と,  $\Theta_N(x, t)$ ,  $t = \rho \sum_{i=1}^k t_i + \sum_{i=1}^l x_i$  (定義 6.3) に対し, 次の優関数評価が成立つ。  

$$\sum_{|\alpha|=\lambda} \frac{1}{\alpha!} \left[ \partial_{(t_*, x)}^\alpha \left( \tilde{\Phi}_k((t)_k, x; (\tilde{t})_k, \tilde{x})^\nu \Theta_N(x, t) \right) \right]_{((\tilde{t})_k, \tilde{x}) = ((t)_k, x)} \ll (n+l)^\lambda \sum_{\mu=2\nu}^{\lambda} \frac{A^\nu}{(\lambda-\mu)!} \rho^{\lambda-\mu} \left( \frac{2}{L-\rho} \right)^{\mu-\nu+1} \Theta_{N+\lambda-\mu}(x, t)$$
 但し,  $\rho > 1$ ,  $A, L$  は  $k$  によらず正定数で  $L > \rho$  である。また,  $(t_*)$  は  $(t_{k-l+1}, \dots, t_k)$  を表すものとする。

[証明]  $\tilde{\Phi}_k((t)_k, x; (\tilde{t})_k, \tilde{x}) = \phi_k((t)_k, x) - \phi_k((\tilde{t})_k, \tilde{x}) - \sum (\partial_{(t_*, x)} \phi_k)((\tilde{t})_k, \tilde{x}) \cdot ((t)_k, x) - ((\tilde{t})_k, \tilde{x}) = \sum_{|\delta| \geq 2} \frac{1}{\delta!} (\partial_{(t_*, x)}^\delta \phi_k)((\tilde{t})_k, \tilde{x}) \cdot ((t)_k, x) - ((\tilde{t})_k, \tilde{x})^\delta$ . ここで,  $y = (y_1, \dots, y_{k+n}) = ((t)_k, x) - ((\tilde{t})_k, \tilde{x})$  と

置くと,  $(*)_{\alpha} \equiv \left[ \partial_{(t,x)}^{\alpha} \left( \tilde{\phi}_k(t_k, x; \tilde{t}_k, \tilde{x}) \right) \theta_{N(r,t)} \right] = \sum_{0 \leq \beta \leq \alpha} \binom{\alpha}{\beta} \left[ \partial_{(t,x)}^{\beta} \tilde{\phi}_k \right] \partial_{(t,x)}^{\alpha-\beta} \theta_N =$   
 $= \sum_{0 \leq \beta \leq \alpha} \binom{\alpha}{\beta} \left[ \partial_y^{\beta} \left( \sum_{|r| \geq 2} \frac{1}{r!} (\partial_{(t_k, x)}^r \phi_k)(t_k, x) \cdot y^r \right) \right]_{y=0} \cdot \rho^{|\alpha| - |\beta|} \theta_{N+|\alpha| - |\beta|}$ . ここで, 補

題 2.1.1° より  $\phi_k(t_k, x) \ll \frac{A_1}{L_1 - \sum_{i=1}^k t_i - \sum x_i}$  なる  $A_1, L_1 > 0$  が存在するから,

$$\sum_{|r| \geq 2} \frac{1}{r!} \left( (\partial_{(t_k, x)}^r \phi_k)(t_k, x) \cdot y^r \right) \ll \sum_{|r| \geq 2} \frac{1}{r!} \frac{A_1 |r|!}{(L_1 - \sum t_i - \sum x_i)^{|r|+1}} \cdot y^r = \frac{A_1 (\sum_{i=1}^k y_i)^2}{(L_1 - \sum t_i - \sum x_i)^2} \cdot \frac{1}{L_1 - \sum t_i - \sum x_i}$$

を得るが, この右辺はさらに適当な  $A, L > 0$  をとり直せば,

$$\frac{A (\sum y_j)^2}{L - \sum t_i - \sum x_i - \sum y_j}$$

により優評価される。  $|\beta| \geq 2\nu$  に対し,  $\left[ \partial_y^{\beta} \left( \frac{(\sum y_j)^2}{L - \sum t_i - \sum x_i - \sum y_j} \right) \right]_{y=0} =$   
 $= \binom{|\beta|}{2\nu} (2\nu)! \frac{\nu(\nu+1) \dots (|\beta| - \nu)}{(L - \sum t_i - \sum x_i)^{|\beta| - \nu + 1}} \ll \frac{|\beta|! 2^{|\beta| - \nu}}{(L - \sum t_i - \sum x_i)^{|\beta| - \nu + 1}}$  であるから  $\nu < L$  なら

ば,  $(*)_{\alpha} \ll \sum_{\substack{0 \leq \beta \leq \alpha \\ |\beta| \geq 2\nu}} A^{\nu} \binom{\alpha}{\beta} |\beta|! \rho^{|\alpha| - |\beta|} \left( \frac{2}{L - \nu} \right)^{|\beta| - \nu + 1} \theta_{N+|\alpha| - |\beta|}(x, t)$  が, 命題

6.1.4° を用いて得られる。これと補題 6.3 と組合せれば,  $\sum_{|\alpha| = \lambda} \frac{1}{\alpha!} (*)_{\alpha}$

に対する求める評価を得る。 (証明終)

[定理の証明]  $k < k'$  なる全ての  $a_{j,k}$  と,  $j < j'$  なる全ての  $a_{j,k}$

に対し  $(\bar{A})$  が成り立つと仮定して  $a_{j,k}$  に対する評価を導く。

第一段  $(A)_{j,k}^{\ell}$ ,  $\ell = 1, \dots, m$  に対する優方程式系。簡単のため,  $k \geq m+1$

と仮定する。  $1 \leq k \leq m$  に対しても同様にできる。 $(A)_{j,k}^{\ell}$  の非斉

次部分と帰納法の仮定と補題 6.2, 6.4 を用いて評価する。

$$\sum_{|\alpha| \geq 2} \sum_{\substack{0 \leq \nu \leq |\alpha| \\ |\alpha| - \nu \neq 1}} \frac{1}{\alpha! \nu!} \lambda^{(\alpha)} \left( \sum_{\ell=1}^{k-m+\ell} t_{\ell} \right) \partial_x \phi \left[ \partial_x^{\alpha} \left( \tilde{\phi}_{k-m+\ell}(t_k, x; \tilde{t}_k, \tilde{x}) \right) \left[ a_{(j,k)}(t_k, x) \right] \right]_{k-m+\ell} \ll$$

$$\ll \sum_{\lambda=2}^{\infty} \sum_{\substack{0 \leq \nu \leq \lambda \\ \lambda - \nu \neq 1}} \frac{A_1 \lambda! n^{\lambda}}{(L - \sum_{i=1}^{k-m+\ell} t_i - \sum x_i)^{\lambda+1}} \frac{A_2^{\nu}}{\nu!} \sum_{\mu=2\nu}^{\lambda} \frac{1}{(\lambda - \mu)!} \left( \frac{2}{L - r} \right)^{\lambda - \mu + 1} C_0 C_1^{j+1-\lambda+\nu+k} \theta_{N(j+1-\lambda+\nu, k)}(x, t) \ll$$

$$\ll \sum_{\lambda_1=2}^{\infty} \frac{2A_1}{(L-r)^2} \cdot \left( \frac{n}{L-r} \right)^{\lambda_1} \sum_{\nu=0}^{\lambda_1} \sum_{\mu_1=\nu}^{\lambda_1} \frac{(\lambda_1 + \nu)!}{\nu! \mu_1! (\lambda_1 - \mu_1)!} \left( \frac{nA_2}{L-r} \right)^{\nu} \left( \frac{2r}{L-r} \right)^{\mu_1} C_0 C_1^{j_1 - \lambda_1 + k + 1} \eta_{N(j_1, k) + 1} \quad (\text{但し}$$

$$\text{命題 6.1.2° 及 } \lambda_1 = \lambda - \nu, \mu_1 = \mu - \nu) \ll \sum_{\lambda_1=2}^{\infty} \frac{2A_1}{(L-r)^2} \cdot \left( \frac{n}{L-r} \right)^{\lambda_1} \left( 1 + \frac{nA_2 + 2r}{L-r} \right)^{2\lambda_1} C_0 C_1^{j_1 - \lambda_1 + k + 1} \eta_{N(j_1, k) + 1}.$$

ここで優方程式系  $(\bar{A})_{j,k}^{\ell}$  を,  $\partial_t [A_{j,k}(t)] \gg \sum_{i=1}^n \frac{A_i}{L - \sum t_i - \sum x_i} \partial_{x_i} [A_{j,k}] + \frac{n^2 A_0}{(L - \sum t_i - \sum x_i)^2} [A_{j,k}]$   
 $+ \left( \sum_{\lambda_1=2}^{\infty} \frac{A_1}{(L-r)^2} \cdot \left( \frac{n(nA_2 + 2L)}{(L-r)^3} \right)^{\lambda_1} C_0 C_1^{j_1 - \lambda_1 + k + 1} \right) \left[ \eta_{N(j_1, k) + 1} \right]$ , により定義すれば, :

これが  $A_{j,k}(t) = C_0 C_1^{j+k} \theta_{N(j,k)}(r,t)$  なる解を持つためには,  $\rho > \frac{nA_1}{L-r} + \frac{n^2}{(L-r)^2} A_1 + \frac{1}{C_1} \cdot \frac{A_1(n(nA_2+2L))^2}{(L-r)^3} \sum_{\lambda=0}^{\infty} \left( \frac{n(nA_2+2L)^2}{(L-r)^3} \right)^{\lambda}$ , であらねばならない。  $C_{1,0} > \frac{n(nA_2+2L)^2}{(L-r)^3}$

に対し  $\rho_0 = \rho(C_{1,0})$  が定まるが, 任意の  $C_1 \geq C_{1,0}$  に対して  $\rho_0$  で良い。

第二段  $(A)_{j,k}^0$  について。(1)  $1 \leq k \leq m$  の場合。この場合だけ

は  $A_{j,k} \ll C_0 B_1^{j_1} B_2^k \theta_{N(j,k)}$ ,  $B_1, B_2$  は  $j, k$  によらぬ正定数,

の形で優評価する。後で  $C_1 = \max(B_1, B_2)$  と置けば求める形の

評価に帰着される。非齊次項,  $(*) \equiv \sum_{p=1}^{k-1} \left[ \sum_{0 \leq \alpha} \sum_{0 \leq 2\nu \leq |d|} \frac{1}{\alpha! \nu!} I_{k-1,p}^{k-p(\alpha)} (\partial_{t_*} \phi_{k-p})^{\alpha} \right.$

$\times \left. \left[ \partial_{t_*}^{\alpha} \tilde{\phi}_{k-p}^{(t)}(t_*, x; (\tilde{t}_{k-p}, \tilde{x}))^{\nu} a_{j+p-|d|+\nu, k-p}(t_{k-p}, x) \right]_{(\tilde{t}_{k-p}, \tilde{x}) = (t_{k-p}, x)} \right]_{t_{k-p} = \dots = t_1 = 0}$  の

優関数評価は,  $I_{k-1,p}^{k-p}$  が  $p$  次の定数係数多項式であるから  $\alpha$  に

関する和が  $j, k$  によらぬ有限和になり, さらに補題 2.2, 6.4,

命題 6.1.2° を用いて整理すれば, 次の形に帰着される。  $(*) \ll$

$\ll \sum_{p=1}^{k-1} \sum_{\mu=0}^p \rho^p D \cdot C_0 B_1^{j-\mu+p} B_2^{k-p} \theta_{N(j,k)}$ , ここに  $D > 0$  は,  $j, k$  によらぬ定数, ここで優方程式  $(\bar{A})_{j,k}^0$  を,  $[A_{j,k}(t)] \gg D \sum_{p=1}^{k-1} \sum_{\mu=0}^p \rho^p C_0 B_1^{j-\mu+p} B_2^{k-p} [\theta_{N(j,k)}]_{t_k = \dots = t_1 = 0}$ ,

,  $(j,k) + (-p, l_0+1)$  に対して,  $[A_{-p, l_0+1}(t)] \gg \frac{A_1}{L - \sum x_i}$  により定義

する。但し,  $\frac{C(x')}{(p-1)!} \ll \frac{A_1}{L - \sum x_i}$  とする。これが  $A_{j,k}(t) = C_0 B_1^{j_1} B_2^k \theta_{N(j,k)}(t)$

なる解を持つためには,  $C_0 B_1^{-l_0} B_2^{l_0+1} \geq A_1$ ,  $l < L_1$  かつ  $1 > \left( D \cdot \sum_{p=0}^{k-2} \rho^{p+1} B_1^{-\mu+p+1} \times \times B_2^{-p} \right) \cdot B_2^{-1}$  であらねばならない。  $\rho = \rho_0$  を与えた時, このような  $B_1, B_2 > 0$  の存在は明らかである。

(2)  $k \geq m+1$  の場合。  $(A)_{j,k}^0$  の非

齊次項,  $(***) \equiv \sum_{p=1}^m \left[ \sum_{\gamma=-\infty}^{p-1} \sum_{0 \leq \alpha} \sum_{0 \leq 2\nu \leq |d|} \frac{1}{\alpha! \nu!} (\tilde{H}_{p,\gamma}^{k-p})^{(\alpha)}(t_{k-p}, x; \partial_{(t_*, x)} \phi_{k-p}) \left[ \partial_{(t_*, x)}^{\alpha} \tilde{\phi}_{k-p}^{(t)}(t_{k-p}, x; (\tilde{t}_{k-p}, \tilde{x}))^{\nu} a_{j+\gamma-|d|+\nu, k-p}(t_{k-p}, x) \right]_{(\tilde{t}_{k-p}, \tilde{x}) = (t_{k-p}, x)} \right]_{t_{k-p} = \dots = t_{k-m+1} = 0}$  により優評価する。

また補題 6.2 及びその証明の論法に従えば,  $\tilde{H}_{p,\gamma}^{(k-p)}(t, x; t_*, \xi) =$

$$= H_{p,q}^{k-p}(t,x; \tau, \beta) - \sum_{\mu=0}^{m-p} \sum_{\substack{|\gamma|=p-q \\ \gamma \geq 0}} \frac{1}{\gamma!} e_{p,\mu}^{(\beta)}(t,x; \tau, \beta) \cdot (\tau_{k-p-\mu} + \lambda_{k-p-\mu})_{(\gamma)}(t,x; \beta) \ll$$

$$\ll \frac{A_1}{L_1 - t - \sum x_i - \sum_{*=k-m}^{k-p} (\tau_* - \lambda_*(0,0; e)) - \sum (\beta - e)_i} + \sum_{\mu=0}^{m-p} \sum_{\substack{|\gamma|=p-q \\ \gamma > 0}} \frac{1}{\gamma!} \frac{A_1 |\beta|!}{(L_1 - t - \sum x_i - \sum_{*=k-m}^{k-p} (\tau_* - \lambda_*(0,0; e)) - \sum (\beta - e)_i)^{|\beta|}} \times$$

$$\times \frac{A_1 |\beta|!}{(L_1 - t - \sum x_i - \sum (\beta - e)_i)^{|\beta|+1}} \ll \frac{A_2 (n+m)^{p-q} (p-q)!}{(L_2 - t - \sum x_i - \sum_{*=k-m}^{k-p} (\tau_* - \lambda_*(0,0; e)) - \sum (\beta - e)_i)^{p-q}} \text{ を得, さら } \vdash$$

$$[(\tilde{H}_{p,q}^{k-p})^{(\alpha)}(t_1, \dots, t_{k-p}, x; \partial_{(t,x)} \phi_{k-p})]_{t_{k-p}=\dots=t_{k-m+1}=0} \ll \frac{A_3 D_2^{p-q+|\alpha|} (p-q+|\alpha|)!}{(L_3 - \sum_{\ell=1}^{k-m} t_\ell - \sum x_i)^{p-q+|\alpha|+1}} \text{ を得る。但し,}$$

$A_i, L_i, D_i$  は  $j, k$  によらぬ正定数である。これを代入し、帰納

法の仮定と補題 6.4 を用いることにより,  $(*) \ll \sum_{p=1}^m \sum_{q=0}^{p-1} \sum_{\lambda=0}^{\infty} \sum_{0 \leq 2\nu \leq \lambda} \sum_{\mu=2\nu}^{\lambda} \left( \frac{\rho^{m-1} D_2^{p-q+\lambda} (p-q+\lambda)!}{(L_4 - r)^{p-q+\lambda+\mu-\nu+2}} \nu! (\lambda-\mu)! \cdot C_0 C_1^{j_1+q-\lambda+\nu+k-p} \theta_{N(j_1+q-\lambda+\nu, k-p)+\lambda-\mu}(r, \rho \sum_{\ell=1}^{k-m} t_\ell + \sum x_i) \right)$ , を得るが

さらし,  $N(j_1, k) - (N(j_1+q-\lambda+\nu, k-p) + \lambda - \mu) \geq p - q + \mu - \nu - 1 \geq 0$  に注意

し,  $r < 1$  と仮定して命題 6.1.2° を適用すれば,  $\lambda_1 = \lambda - \nu, \mu_1 = \mu - \nu, \kappa = p - q + \lambda,$

と置くことにより,  $(*) \ll \sum_{p=1}^m \sum_{q=0}^{p-1} \sum_{\lambda_1=0}^{\lambda_1} \sum_{\nu=0}^{\lambda_1} \sum_{\mu_1=\nu}^{\lambda_1} \frac{\rho^{m-1} D_2^{\kappa+\nu} (\kappa+\nu)!}{(L_4 - r)^{\kappa+\nu+\mu_1+2}} \nu! (\lambda_1 - \mu_1)! (\kappa - \lambda_1 + \mu_1 - 1)! \times$   
 $\times C_0 C_1^{j_1+k-\kappa} \theta_{N(j_1, k)} \ll \sum_{k=1}^{\infty} \frac{\rho^{m-1}}{(L_4 - r)^2} K \left( \frac{D_2}{(L_4 - r)^2} \right)^{2K} \cdot C_0 C_1^{j_1+k-K} \theta_{N(j_1, k)}(r, \rho \sum_{\ell=1}^{k-m} t_\ell + \sum x_i),$

を得る。但し  $D_2$  は  $j, k$  によらぬ正定数である。今,  $\rho = \rho_0$  と

とり,  $D_4 = \max\left(\frac{\rho_0^{m-1}}{(L_4 - r)^2}, \left(\frac{D_2}{(L_4 - r)^2}\right)^2\right)$  とすれば,  $(A)_{j,k}^0$  に対する優関数方

程式として,  $(\bar{A})_{j,k}^0 [A_{j,k}(t)]_{t_k=\dots=t_{k-m+1}=0} \gg \sum_{\kappa=1}^{\infty} \kappa D_4^{\kappa+1} C_0 C_1^{j_1+k-\kappa} \theta_{N(j_1, k)}(\rho \sum_{\ell=1}^{k-m} t_\ell + \sum x_i)$

を得る。このが  $A_{j,k}(t)_{k,x} = C_0 C_1^{j_1+k} \theta_{N(j_1, k)}(r, \rho \sum_{\ell=1}^k t_\ell + \sum x_i)$  なる解を

もつためには,  $\rho = \rho_0, r < \min(1, L_4)$  に対し  $C_1^{-1} \sum_{\kappa=0}^{\infty} \kappa \cdot D_4^{\kappa+2} \cdot C_1^{-\kappa} < 1$

をみたすように  $C_1 > 0$  とすればよい。第一段, 第二段(1)で定

めた  $C_1$  と, この  $C_1$  との最大のものを改めて  $C_1$  と置けば, 定理

が得らる。(証明終)

§ 7 形式解の収束

§6 に於る規約と優関数評価をみた

すように定められた  $a_{j,k}((t)_k, x)$  に対し, 形式解 (U) は意味を持つだろうか? 初期面のわずかな近傍ではあるが答は肯定的である。以下このことを証明しよう。以下  $L$  は補題 6.3 のもの,  $r < L$ ,  $\rho > 1$ ,  $C_0, C_1$  は §6 に定められた正定数とする。

補題 7.1  $S_1 \equiv \{(0, x); r - \sum_{i=1}^n |x_i| > 0\}$  と置く。  $S_1 \setminus T$  上の任意の点  $(0, x^0)$ ,  $x_i^0 \neq 0$  に対し, 適当な  $\delta > 0$  と,  $\mathbb{C}^n$  に於る  $x^0$  の近傍  $\Sigma_{x^0}$  とが存在し,  $\sum_{j=1}^k |t_j| < \delta |x_1^0|$  をみたす任意の  $(t)_k$  と,  $x \in \Sigma_{x^0}$  に対し評価  $K_0 |x_1^0| \leq |\phi_k((t)_k, x)| \leq K_1 |x_1^0|$  をみたすようにできる。但し,  $K_0, K_1 > 0$  は  $(t)_k, x$  のとり方によらず定数である。

[証明]  $\phi_k$  に対する優関数評価 (p.20 参照)  $\phi_k((t)_k, x) - x_1 \ll \frac{A}{L - \sum_{l=1}^k t_l - \sum x_i} - \frac{A}{L - \sum x_i} = \frac{A \sum t_l}{(L - \sum t_l - \sum x_i)(L - \sum x_i)}$  より,  $\sum |t_l| + \sum |x_i| < L$  なる  $\forall x \in S_1$  に対し  $|x_1| - \frac{A \sum |t_l|}{(L-r)(L - \sum |t_l| - r)} \leq |\phi_k((t)_k, x)| \leq |x_1| + \frac{A \sum |t_l|}{(L-r)(L - \sum |t_l| - r)}$  が得られる。  $\delta, \Sigma_{x^0}$  と  $\inf_{x \in \Sigma_{x^0}} \left( \frac{|x_1|}{|x_1^0|} - \frac{A \delta}{(L-r)(L - \delta |x_1^0| - r)} \right) \equiv K_0 > 0$  が成立するようにとり,  $K_1 \equiv \sup_{x \in \Sigma_{x^0}} \left( \frac{|x_1|}{|x_1^0|} + \frac{A \delta}{(L-r)(L - \delta |x_1^0| - r)} \right)$  と置けば結論が得られる。 (証明終)

上の補題で定められる  $\delta = \delta_{x^0}$  と  $\Sigma_{x^0}$  と, さらに条件  $e_1 \equiv \inf_{x \in \Sigma_{x^0}} (r - \rho \delta |x_1^0| - \sum |x_i|) > 0$  をみたすように取直す。このとき,  $\Omega_{x^0} \equiv \{|t_l| < \delta\} \times \Sigma_{x^0}$  に於て形式解 (U) の評価を行いなから, 収束の条件を求めよう。まず (U) の各項を評価する。  $N(j, k) \geq 0$  なり  $(j, k)$  ( $k \geq l_0 + 1$ ) に対し,  $u_{j,k}(t, x) \equiv \int_0^t dt_1 \int_0^{t-t_1} dt_2 \cdots \int_0^{t-t_1-\cdots-t_{k-2}} dt_{k-1} f_j(\phi_k((t)_k, x)) a_{j,k}((t)_k, x)$  と置く。積分路に沿って,  $t_l = \sigma_l t$ ,  $\sigma_l \geq 0$ ,  $\sigma_1 + \cdots + \sigma_k = 1$  ( $1 \leq l \leq k$ ),

と表わされるから、 $|t| < \delta |x_1^0|$  ならば  $(t)_k$  は補題 7.1 の条件をみたす。故に補題 7.1 と定理 6.1 を用いて、 $\Omega_{x_0}$  上の次の一様評価が得られる。

$$|u_{j,k}(t,x)| \leq \int_0^t |dt_1| \cdots \int_0^{t-t_1-\cdots-t_{k-1}} |dt_{k-1}| \frac{(j-1)!}{(K_0 |x_1^0|)^{-j}} C_0 C_1^{j+k} \frac{N(j,k)!}{e_1^{N(j,k)+1}} =$$

$$= \frac{(j-1)! N(j,k)!}{(k-1)!} \cdot \frac{C_0 C_1^{j+k} |t|^{k-1}}{(K_0 |x_1^0|)^{-j} e_1^{N(j,k)+1}} \left( \leq \frac{(j-1)! N(j,k)!}{(k-1)!} \cdot \frac{C_0 C_1^{j+k} \delta^{k-1} |x_1^0|^{k-1}}{(K_0 |x_1^0|)^{-j} e_1^{N(j,k)+1}} \right) \quad (j \leq -1)$$

に對し),  $|u_{0,k}(t,x)| \leq \frac{N(p-l_0, k)!}{(k-1)!} \cdot \frac{C_0 C_1^{p-l_0+k} |t|^{k-1}}{e_1^{N(p-l_0, k)+1}} \quad (j=0 \text{ に對し}),$

$$|u_{j,k}(t,x)| \leq \int_0^t |dt_1| \cdots \int_0^{t-t_1-\cdots-t_{k-2}} |dt_{k-1}| \frac{(K_1 |x_1^0|)^{j-1}}{(j-1)!} C_0 C_1^{j+k} \frac{N(j,k)!}{e_1^{N(j,k)+1}} = \frac{N(j,k)!}{(j-1)! (k-1)!} \frac{C_0 C_1^{j+k} (K_1 |x_1^0|)^{j-1} |t|^{k-1}}{e_1^{N(j,k)+1}}$$

( $j \geq 1$  に對し)。この右辺を  $U_{j,k}(t)$  と置き、 $\sum_{N(j,k) \geq 0} U_{j,k}(t)$  の評価を可する。和を、 $\sum_{\substack{j \leq -p \\ N(j,k) \geq 0}} + \sum_{-p < j \leq 0} + \sum_{j \geq 1}$   $= U^{(1)} + U^{(2)} + U^{(3)}$ , と分ける。

$U^{(1)}$  の評価を可するため、 $k(j) = \left[ \frac{m}{m-1} (-j+j_0) \right] + m + 2$ , 但し  $j_0 = -p - m + l_0$ , を導入する, 但し,  $l_0 = 0$  の時限り  $k(-p) = 1$  と定める。このとき、 $U^{(1)} = \sum_{j=-\infty}^{-p} \sum_{k=k(j)}^{\infty} \frac{(j-1)! N(j,k)!}{(k-1)!} \frac{C_0 C_1^{j+k} |t|^{k-1}}{(K_0 |x_1^0|)^{-j} e_1^{N(j,k)+1}} \leq$

$$\leq \sum_{j=-\infty}^{-p} \frac{(j-1)!}{(k(j)-1)!} \frac{C_0 C_1^{j+k(j)} |t|^{k(j)-1}}{(K_0 |x_1^0|)^{-j}} \sum_{k=0}^{\infty} \frac{N(j, k(j)+k)!}{k!} \frac{C_1^k |t|^k}{e_1^{N(j, k(j)+k)}} \text{ を得るか,}$$

$$N(j, k(j)) = 0 \text{ であるから, } N(j, k(j)+k) = j_1 + \left[ \frac{m-1}{m} (k(j)+k) \right] \leq \left[ \frac{m-1}{m} k \right] + 1.$$

故に適当な定数  $E_1 > 0$  が存在して、 $U^{(1)} \leq E_1 \cdot \frac{C_0 |t|^{l_0} C_1^{m-1}}{(K_0 |x_1^0|)^{p+m-2} e_1^{m-2} \exp \left\{ \left( \frac{C_1}{(K_0 |x_1^0|)^{m-1}} + \frac{C_1^m}{e_1^{m-1}} \right) |t|^m \right\}}$

を得る。 $U^{(2)}$  に對する評価は次の通りである。 $U^{(2)} = \sum_{j=-1}^{j_0+1} \sum_{k=l_0+1}^{\infty} \frac{(j-1)! N(j,k)!}{(k-1)!} \times \frac{C_0 C_1^{j+k} |t|^{k-1}}{(K_0 |x_1^0|)^{-j} e_1^{N(j,k)+1}} + \sum_{k=l_0+1}^{\infty} \frac{N(p-l_0, k)!}{(k-1)!} \frac{C_0 C_1^{p-l_0} |t|^{k-1}}{e_1^{N(p-l_0, k)+1}} \leq E_2 \frac{C_0 C_1^{p+m-1} |t|^{l_0}}{(K_0 |x_1^0|)^{p-1} e_1^{p+m-3}} \times$

$$\times \exp \left( \frac{C_1^m |t|^m}{e_1^{m-1}} \right) \left( \leq E_2 \cdot \frac{C_0 C_1^{p+m-1} \delta^{l_0} |x_1^0|^{l_0+1-p}}{K_0^{p-1} e_1^{p+m-3}} \exp \left( \frac{C_1^m \delta^m |x_1^0|^m}{e_1^{m-1}} \right) \right), \text{ 但し } E_2$$

は適当な正定数。最後に、 $U^{(3)}$  は次のように評価される。

$$U^{(3)} = \sum_{j=1}^{\infty} \sum_{k=l_0+1}^{\infty} \frac{N(j,k)!}{(j-1)! (k-1)!} \frac{C_0 C_1^{j+k} (K_1 |x_1^0|)^{j-1} |t|^{k-1}}{e_1^{N(j,k)+1}}, \text{ この右辺は } \frac{C_1 \cdot K_1 |x_1^0|}{e_1} < 1$$

ならば収束し、 $U^{(3)} \leq E_3 \cdot \frac{C_0 |t|^{l_0} C_1^{m+p-l_0}}{e_1^{m+p-l_0-1}} \frac{1}{1 - \frac{C_1 K_1 |x_1^0|}{e_1}} \cdot \exp \left( \frac{C_1^m |t|^m}{e_1^{m-1}} \right) \left( \leq$

$$\cong E_3 \cdot \frac{C_0 \delta^l \cdot |x_1^0|^l \cdot C_1^{m+p-l}}{e_1^{m+p-l-1}} \cdot \frac{1}{1 - \frac{C_1 K_1 |x_1^0|}{e_1}} \cdot \exp\left(\frac{C_1 \delta^m |x_1^0|^m}{e_1^{m-1}}\right) \Big). \text{ 但し, } E_3$$

は適当な正定数。ところで,  $\delta > 0$  と  $\sum x_i$  を小さくとすれば  $K_1$  は

くらでも 1 に近くとれる。従って初期面  $S$  と, 条件

$$(S) \quad S = \{(0, x); \gamma - \sum_{i=1}^n |x_i| > 0, \frac{C_1 |x_1|}{\gamma - \sum |x_i|} < 1\}$$

をみたすように取直せば,  $S \setminus T$  の任意の点  $x^0, x_i^0 \neq 0$  に対し

$\delta > 0$  及び  $\sum x_i$  を要求される全ての条件をみたすように定める

ことができる。結局次の定理を得る。

定理 7.1 初期面上の原点の近傍  $S$  を条件 (S) をみたすように十分小さくとすれば,  $S \setminus T$  の各点  $x^0, x_i^0 \neq 0$  に対し  $\delta_{x^0} > 0$  と  $x^0$  の  $C^n$  に於ける適当な近傍  $\sum x_i$  が存在して,  $\Omega_{x^0} = \{|t| < \delta |x_1^0|\} \times \sum x_i$  の中で (U) の右辺は一様絶対収束して (E), (C) をみたす。

### 参考文献

- [1] Bony, J.M. - Schapira, P.; Propagation des singularités analytiques pour les solutions des équations aux dérivées partielles. Ann. Inst. Fourier, 26.1, p81-140 (1976).
- [2] Hamada, Y.; The singularities of the solutions of the Cauchy problem. Publ. RIMS, Kyoto Univ., 5, p21-40 (1969).
- [3] Hamada, Y., Leray, J., Wagschal, C.; Système d'équations aux dérivées partielles à caractéristiques multiples problème de Cauchy ramifié; hyperbolicité partielle. J. Math.

- Pures Appl., 55, p 297-352 (1976).
- [4] Hamada, Y., Nakamura, G.; On the singularities of the solution of the Cauchy problem for the operator with no uniform multiple characteristics. Ann. Scuola Norm. Sup. Pisa, 4, p 725-755 (1977).
- [5] Ishii, T.; On a representation of the solution of the Cauchy problem with singular initial data. Proc. Japan Acad., 56, Ser A, 2, p 59-61 (1980).
- [6] Kobayashi, T.; On the singular Cauchy problem for operators with variable involutive characteristics. (to appear).
- [7] Kumano-go, H., Taniguchi, K.; Fourier integral operators of multiphase and the fundamental solution for a hyperbolic system. Funkcial. Ekvac., 22.2, p 161-196 (1979)
- [8] 熊, 徳郎 準述, 樋口美紀 記;  $\mathcal{F}$ - $\mathcal{L}$  積分作用素と双曲型方程式の基本解. 都立大学数学教室セミナー報告.
- [9] Ouchi, S.; Asymptotic behaviour of singular solutions of linear partial differential equations in the complex domain. J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, 27.1. p 1~36 (1980).
- [10] Urabe, J.; On the theorem of Hamada for a linear second order equation with variable multiplicities. J. Math. Kyoto Univ. 19.1, p 153-170 (1979).
- [11] Nakamura, G.; The singularities of solutions of the Cauchy problems for systems whose characteristic roots are non-uniform multiple. Publ. RIMS, Kyoto Univ., 13, p 255-275 (1977/78).